



第31回日本医療薬学会年会

メディカルセミナー16

地域医療連携で求められる 薬剤師の役割 ～真の連携を実現するには～

WEB開催

2021年10月9日(土)

18:00～19:00

座長

武田 泰生先生

鹿児島大学病院 薬剤部 教授・部長

演者

伊東 弘樹先生

大分大学医学部附属病院 副病院長
薬剤部教授・薬剤部長

共催

第31回日本医療薬学会年会/日医工株式会社

<https://site2.convention.co.jp/31jsphcs/>

メディカルセミナー16

地域医療連携で求められる薬剤師の役割 ～真の連携を実現するには～

大分大学医学部附属病院 副病院長
薬剤部教授・薬剤部長

伊東 弘樹先生

医療の高度化・複雑化、少子高齢社会の進展により医療を取り巻く環境が大きく変化している。

その中で、医療の質向上ならびに医療安全確保の観点において、薬剤師の役割は益々重要となっている。我々病院薬剤師の主たる業務は、入院患者に最適な薬物療法を提供することであるが、それに加え現在では、外来患者への関与と、「医療機関」、「保険薬局」、その他の医療提供施設との連携強化も求められている。大分大学医学部附属病院では、2015年に薬剤師外来(物忘れ外来)を開設して以来、院外処方箋へのレジメン名・検査値・身体情報の印字、がん薬物療法相談窓口の設置、疑義照会等事前同意プロトコルの導入、地域医療機関への薬剤師の派遣など地域との連携を強化してきた。そこで本セミナーでは、①経口抗がん剤を対象とした薬剤師外来、②総合患者支援センター(以下、センター)における入院患者支援業務を紹介する。

当院では、2018年に、経口抗がん剤レンバチニブを対象とした薬剤師外来を開始した。入院での薬剤導入時には、開始基準の確認ならびに服薬指導を行い、外来通院後も、継続的に薬剤師が面談をしている。その際、事前に作成した問診票および副作用対策マニュアルを活用することで、医師への情報提供と処方提案が簡便となる。さらに現在では、外来化学療法室での業務見直しにより、連携充実加算も算定しており、保険薬局との連携につながっている。また、2020年からセンターにおいて入院予定患者の面談を開始した。薬剤師は、服用中の薬剤ならびにアレルギー等をチェックし、患者に術前中止薬を指示するとともに、かかりつけ薬局にそれら情報を提供する。かかりつけ薬局では、中止薬剤の整理・指導ならび入院期間に応じた持参薬日数を調整し、その結果を医療機関にフィードバックすることで、入院時には患者情報が一元管理できており、安全な薬物療法の提供が可能となる。

地域医療連携の基本は情報共有であり、医療機関から患者情報を一方的に提供するのではなく、保険薬局等と共有しながら薬物療法の適正化につなげていくことが重要である。薬剤師にとって、外来・入院すべての診療過程を切れ目なく支援することが今後の課題であり、多職種での患者情報の共有が真の連携の近道である。

略歴

1996年	熊本大学薬学部薬科学科卒業	2014年	大分大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長
1996年	医療法人萬生会熊本第一病院		大分大学医学部薬剤学講座 教授
1997年	大分医科大学医学部附属病院薬剤部	2017年	大分大学医学部附属病院 副病院長(兼任)
2002年	大分医科大学医学部附属病院薬剤部 薬剤主任		現在に至る
2003年	大分医科大学医学部附属病院薬剤部 副薬剤部長		